

REDISCOVERY TSUSHIMA

# 津島短編小説コンテスト

平成29年度受賞作品集―愛知県津島市が舞台の短編小説

大賞

結衣公記

佳作

帰郷





目次

受賞者	1
選考講評	2
受賞作品	4
大賞	
「結衣公記」	仲手川純一
佳作	
「帰郷」	中村 浩史
応募結果	16
募集要項	18

大賞

結衣公記

仲手川純一（津島市）



印鑑証明書を貰いに行った津島市総合保健福祉センターで公募のチラシを見つけて、全国の作家志望の皆さんより実際に住んでいる自分の方が津島については詳しいだろう、この短編小説の中に津島の魅力、おもしろさを自分なりに表現しよう、と思っただけで応募してみました。文章力がないため「高校生の手記」という形にしたのが功を奏したのかなと思います。一昨年父が亡くなり地元津島に戻ってごろ寝とネットサーフィンの日々でありましたが素晴らしい評価をいただき、このごろ寝にも意味があったのだと嬉しく思っております。

佳作

帰郷

中村 浩史（名古屋市中村区）

津島神社が好きなので、必然的に津島は好きな街のひとつだ。そんな街が主催している賞を頂けるなんて、とても嬉しい。ただひとつ、受賞した作品の内容が少々暗くなってしまったことだけが心残りである。なぜそうなってしまったのか、今となっては自分でもよく憶えていない。ただ、作品を書くために、津島市内の方々歩き回ったことはよく憶えている。自分の足で歩き、肌で感じてみないと、作品が書けない。四十歳という節目の年のスタートに受賞の電話を頂いて、私にとっては嬉しい誕生日プレゼントとなりました。最後に、選んでくださった選考委員の皆さまに心より感謝を。ありがとうございます。

# 選考講評

## 選考委員長

### 堀田 あけみ

(作家・大学教授)



1964年 愛知県七宝町(現あま市)生まれ。作家・心理学者・椋山女学園大学教授。  
1980年 中村高校在学中に『1980アイコ十六歳』で文藝賞受賞。

最終選考に残った作品のレベルが非常に高かったと思います。でも、そんな中で「結衣公記」の大賞は、すんなり決まりました。主人公とその周囲の人々が、少ない枚数の中で生き生きと魅力的に描かれていて、歴史をふまえた上で今の津島の良さを発信できている点を評価しました。小説は言葉でしか勝負できませんが、この作品は言葉のセンスも素敵だと思います。敢えて、とりとめなく書いているのに、よく伝わります。佳作は「帰郷」「千年の祝福」で随分悩みました。私にとっては「帰郷」冒頭の、バスから見える風景と過去の記憶を並行させる書き方が大きな魅力になりました。私がいとも使っている何千回と乗った路線です。すべての情景が目につかんで、主人公の涙に辿り着くまで、一気に読めました。どの作品も、今の津島の魅力を存分に伝えていていると思います。

#### 【主な著書】

『イノセントガール』『唇の、することは。』『発達障害だって大丈夫』『おかあさんになりたい』『おとうさんのつくりかた』『花くらべ』『泣けてくるじゃない』『もういない、あなた』など。

### 清水 義範

(作家)



1947年 名古屋生まれ。作家。  
1981年 『昭和御前試合』で文壇デビュー。  
1986年 『蕎麦ときしめん』で前例のないバスターシュー(様式模写)の分野を開拓。  
1988年 『国語入試問題必勝法』で吉川英治文学新人賞受賞。  
2009年 第62回中日文化賞受賞。

「結衣公記」の文章の勢いと、若々しさがとても魅力的であった。これは若い女性のナチュラルな語りであろうと予想していただけに、男性の作者だったことには驚かされた。ユーモアのある高校生のリアリティーは心地よい読後感につながっている。津島市の魅力の中には若々しさもある、と感じさせてくれた点において、なかなか価値があると思った。佳作となった「帰郷」は、とてもドラマチックで、しかも場面の豊かさがあつた。バスに乗ってどんな複雑な事情が語られていくという構成のため、話がダイナミックで動きがある。心の中の動きがスムーズに語られており、ラストも物語として深い終わり方だと思った。シーンがどんどん動いて、ラストでスコンときまるところは、なかなかのテクニクだと思った。

#### 【主な著書】

『金鯱の夢』『永遠のジャック&ベティ』『イマジン』『おもしろくても理科』『尾張春風伝』『愛と日本語の惑乱』など。

## 清水 良典

(文芸評論家)



- 1954年 奈良県生まれ。  
文芸評論家・愛知淑徳大学教授。  
1986年 群像新人文学賞(評論部門)受賞。  
1993年 名古屋市芸術奨励賞受賞。  
2011年 愛知県芸術文化選奨文化賞受賞。  
2012年 第65回中日文化賞受賞。

粒よりの作品がそろっていて、読むのが楽しかった。「結衣公記」の軽妙で等身大の方言からは、人物たちの顔が自然と浮かんできて、旧知の人のような親近感を覚えた。

佳作となった「帰郷」はバスの車窓の風景と記憶との連動が、まるで映画を見ているような効果を挙げていて、巧みな構成に感心した。ラストも徒らにセンチメンタルにならずに上品だった。

同じくらい感銘を受けたのは「千年の祝福」である。津島太鼓への誇りと、病魔と闘う力強さが読者の胸に深く残る作品だった。

この三作品が選考会では二作品に絞られることになり、苦しい選択だったが、「結衣公記」と「帰郷」のショートドラマが脳裏に絵として浮かぶ映像性が、やや優っていたといえる。

第二回目はレベルが大幅に向上し、今後の応募作品への期待が高まるばかりだ。今から第三回が楽しみである。

### 【主な著書】

- 『笠野頼子 虚構の戦士』  
『自分づくりの文章術』村上春樹はくせになる』『2週間で小説を書く!』  
『MURAKAMI』『文学の未来』『あらゆる小説は模倣である』など。

## 熊澤 尚人

(映画監督・脚本家)



- 1967年 名古屋市生まれ。  
映画監督・脚本家。  
1994年 映倫ポニーキャニオン在職中に自主映画『リベラル』がPFFに入選。  
2003年 短編映画『Tokyo Noir〜Birthday〜』がスペイン映画祭に招待。ポルト国際映画祭最優秀監督賞を受賞する。  
2005年 『ライカナイからの手紙』で長編映画デビュー。

皆さん津島の魅力を様々な角度から出そうとアイデアを練っており、大変面白く読ませて頂きました。  
最終選考に残った作品はどれも魅力的で光るものがありました。

「結衣公記」は主人公と登場人物のキャラクターが今目的で魅力的でした。方言で語られる台詞や心情が心地よく、思わず笑いました。津島に暮らす若者の気分と空気をリアルに上手く表現していた。「ええ風吹いたら、つかまえたつてちよ」の台詞が好きです。

「帰郷」は故郷に向かうバスの車窓の心象風景が良く、ロードムービー的な味わいがある。

ジョギングコースを走り出す動的描写、そして安易に終わらないラストも良かった。

### 【主な代表作】

- 『虹の女神』『雨の翼』『DIVE!』『おと・な・り』  
『君に届け』『ジグスIII』『近キヨリ恋愛』  
『心が叫びたがってるんだ (2018年3月、DVD発売)』  
『ユリゴコロ (2018年4月、DVD発売)』

## 木全 純治

(映画館支配人)



- 1948年 名古屋市生まれ。  
1983年 名古屋市中村区の映画館シネマスコール支配人。(～現在)  
椋山女学園大学非常勤講師、中部大学非常勤講師。

大賞になった「結衣公記」は、語り口が軽妙で、高校生の日常世界が生き生きと伝わる好感が持てる作品であった。私は「帰郷」の出だしが好きであった。映画を作るとき、起承転結の起となる最初の衝撃度が肝要となる。「帰郷」は「今から約五年前、私は自分の夫を殺した」と、オットーと思わせる始末から、その後の手際の良い描写が光る。ラストの終わり方も優れている。短編小説と映画の手法が、かならずしも同期するとは限らないが、驚きの表現があると読み手をグッと引きつける。「シユガートリスト」は、喫茶店のマスターの心境が、心地よく残る作品となる。以前の会社の後輩、常連客との何気無い会話から、主人公の立場が明確になる点は読み応えがある。「千年の祝福」は、全く知らなかった津島太鼓に焦点を当てた所がすぐれている。津島神社、天王川公園ばかりでなく、津島の潜在力をどしどし取り入れてほしい。

### 【主な芸術活動】

- 1992年 アジア文化交流祭代表(～1995年)  
中日新聞ビデオ案内担当(～現在)  
1996年 あいち国際女性映画祭ディレクター(～現在)  
2005年 EXPO2005フレンドシップ・フィルム・フェスティバルディレクター  
2007年 NHK文化センター映像制作講師(～現在)

# 大賞

## 結衣公記

仲手川純一

文化祭の出し物についての話し合いで、バカな男子（岡本とか鈴木らへん）が推した「ゲイカフェ」が担任の真野によって即却下されて、「なんかない？」と隣の席の平野さんが言ってきたので、祭（地元では祭と言えば天王祭り、神社と言えば津島神社で公園と言えば天王川公園のことなので覚えておいて欲しい）の時に叔父さん（母の弟）が「信長が祭りを見た」という記録がある、という話から昔、信長の家来だった人が書いた『信長公記』という書物に津島がでてくるという話になり、現代語訳もでて図書館にあると聞いて借りて来てパラパラめくってみたら「津島の堀田道空邸の庭で信長が天女のコスプレして踊った」という記述があったので、それ再現したらいいんじゃない？と言ったらなぜか平野さんのテンションだだ上がりで、一気に『信長のコスプレダンスパーティー』に決定してしまっただけだ。

「それで結衣、どうすんの？」と昼休みに親友のエリちゃん（かわいい）が聞いてきたが、こちらとしては特にアイデアもない

のだけど、ていうかここは平野さんが仕切るべきなんじゃないの？と思っただがガリ勉キャラの平野さんがここで大活躍できるとも思えず、とりあえず、

「まずは信長役、決めなかんわ」と言ってみた。

「やっぱイケメンだよ。信長」

「そりゃあイケメンじゃな盛り上がりかんわ」

「ほんならうちのクラスの男子じゃいかんがね」と言うので、

「イケメン知つとる？」と尋ねたら、

「おる。一年の森君、サッカー部！」とエリちゃんのテンションも上がってきた。

「間違いないイケメンだわ」

「知らんわ。でら？ だら？」

「どらだわ」

「・相だがね」というやり取りがあった。

それで放課後森君の教室まで見に行ったのだが、はたして森君は確かにアイドルのようなイケメンだった。ふとエリちゃん

を見ると、森君を見るその目が「はあと」になっていて「かわいいな」と思った。よし、森君はエリちゃんに任せよう。

お風呂に入った後に叔父さんとラインした。

叔父さんは私と同じ高校をでて東京の大学に行ったものの卒業後は仕事が続きせず（母曰く子供の頃からメンタルが弱い）職を転々としてフリーターみたいな感じで生きていたのだが、昨年祖父が亡くなって、祖母の世話のために帰ってきて、祖母の病院の送り迎えとか庭の片づけなんかをやつて、たまにバイトしたりしてなんとなくブラブラしているダメ人間で、またビジュアルが少々キモオタ風ということもあり、母は私が叔父さんと話したりするのを好ましく思っていないようだが、特にエロい目で私を見てくるような感じもなかったのでたまにラインしたりしている。（電話は叔父さんが苦手らしいのではない）

「今日思いついたんだけど、神社の横に『堀田家住宅』ってあるが？」

「おう。あれ昔は堀田邸って言っとったがな」

「あれって堀田道空の家？　っていうか堀田道空って誰？」

「なんか美濃の斎藤道三の家来らしいよ」

「美濃って岐阜でしょ？　遠いがね？」

「昔はそういうのあったらしいよ。知らんけど」

「ふーん。ほんで堀田家住宅がその道空さんの家なの？」

「ちゃうだろう？　あれは江戸中期だで。時代が合わんでかわ。ほんでも親戚とかじゃねえか？　四家七苗字って聞いたことあるか？」

全然わからなかったのでネットで検索しまくった結果、かなり津島に詳しくなった。

中世、津島は有力土豪による自治領のような感じだったようで、そこへ織田弾正忠家（この意味がわからないけど信長の家系らしい）が攻撃して、後に和陸して信長の一族に従う感じになったっぽい。それでなんか津島は当時は湊町でめっちゃお金持ちだったみたいでその資金を利用して、信長のお父さんがメインの織田家を圧迫して尾張で勢力を伸ばし、そこから家督を継いだ信長の天下統一の夢が始まったみたいだ。

なんか信長のお父さんがすごい！　と思った。お父さんががんばったおかげで信長が夢を見たような気がする。例えば豊臣秀吉みたいな裸一貫スタートだったらどうか。信長は信長公になれたんだろうか？

昼休みにお弁当を食べながらエリちゃんがニヤニヤしているので何事かと聞いてみたら、信長役の交渉と称して森君とラインを始めたのだそうだ。なんとというか「今が人生のピークです！」という空気を全身から発していて眩しい。

「ほんで森君、信長役はオーケーなの？」

「うん。ダンスは自信ないって言っとったけど、一緒に練習しよう！　って」

「ええがね。ロマンスの予感だがね」

「なんか文化祭に向けて盛り上がってきたね」

盛り上がるとるのはあんだだけだわ、とは言えなかった。私にはそういうところがある。

月曜日のホームルーム。担任の真野が教室に入ってきて言った。「仮装ダンス大会は中止と職員会議で決まりました。最近LGBTとか問題になつとるで・高校の文化祭にはふさわしくないで」

これにはなんやかんややる気になっていた男子たちもどよめいていたけど、とは言えわざわざ職員室に抗議に行くようなパッションを持っている人もおらず、「信長コスプレダンスパーティー」計画は完全に白紙となり、結局クラスの真面目グループ主導で「LGBTが抱える社会課題についての展示」をやるということになった。あらあら。

「ええんか？」と叔父さんのライン。

「うん、まあしようがないよ」

「ほうか。どうしてもやりたかったら戦ったほうがええぞ」

「ええんだわ。別にそんな執着しとらんで」

「ほうか。まあ今回は結衣のターンじゃなかったってことか」

「うん」

「まあそのうちええ風ふくで。ええ風吹いたらつかまえたってちよう」

「何それ？」

「人生には何回かええ風吹くで」

「ふーん・叔父さんにも吹いた？」

「え・・・」

やばい！　触っちゃいけない叔父さんのデリケートゾーンだったか？

「吹いたよ」

「え？　吹いたの？」セーフや・・・

「ちよいちよい吹いたんだわ。思い返せば。それをワシは逃してきたんだわ。痛恨でござる」

「ござる（笑）」

「年とともに吹かんくなるで。ワシもちよつと前まで高校生だったのに、いつのまにかもうアラフォーだがや。高校入ってすぐに勉強ついてけんくなつて、そつからずとうだつ上がらんがや。巻き返せんうちに周りも自分みたいな奴ばかりだわ。仕事で会った同世代の人が突然死とかある。親が死んでも金なくて葬式だせんかった奴もおる」

「ほう」そうなのか・・・

「結衣は『今風吹いたかな？』って思ったら全部行ってちよう。」

グイって行つてちょう。ほんで豊かな人生にしてちょうよ」

「はあ・・・了解」とかわいいいネコちゃんのスタンプも押ししておいた。

次はエリちゃんだ。

「森君怒つとつた？」と聞く。

「ううん。しょうがないって」

「ほんならよかつたわ」

「うん。それで、今度の日曜なんだけど」

「何？」

「森君の友達がなんか歴史オタクで、堀田家住宅見たいって」

「行ったことないかな？」

「名古屋の子らしくて」

「ほうなんだ。名古屋の高校落ちたんかな？」

「知らんけど。そんなもんで日曜日に森君とその友達と三人で見に行つたって欲しいんだわ」

「ええけど。エリちゃん来んの？」

「模試だもんで。名大模試」

「え？ 名大受けるの？ ってゆうか、うちらまだ二年だが？」

「三年からじゃ間に合わんがね」

「ほうなんか。全然知らんかつたわ」

「うん。人生かわいいだけはいかんぞ」

なんと！ この人からそんな台詞が放たれるとは！ エリちゃん

ん、恐ろしい子。

「エリちゃんかわいいだけじゃなかつたんだ」

「おうよ！」

「キャラおかしなつとるよ」

「だもんで、森君？ 正直ラインやつとつてもおもしろいんだわ。バカっぽいっていうか」

哀れ森君・・・なんかごめん。

「だもんで結衣、あんたよかつたら付き合つたりゃあ。それか友達のオタクか・・」

ちようどいい気候の日曜日。正直面倒臭かつたが元はと言えば私の発案で始まつたことであるため、今日はしっかりとお世話させていただきまっしょい！ と神社の南門のどこにある交番の前で待っていると、森君が自転車に乗つてやつてきた。ひとり。

「ああ結衣先輩、どうも」

「どうも・・友達は？」

「それがなんかおなか痛いつて・・」

「そうか・・ほんならどうする？ たこ焼き食べて帰る？」

「せっかく来たもんで・・見ていきます。俺も見たことないんで。あ、たこ焼きも食いたい・」

というわけで神社でお参りしてから二人で見学することにした。

勝手口？ のところに「堀田」と書かれた暖簾がかかっていて堀田木瓜といわれる家紋が描かれていてカッコいい。ちなみに津島神社の神紋は織田木瓜という織田家の家紋と同じデザインだ。

三百年前に建てられたとは思えない綺麗さで、私は特に台所のカマドがカッコよくてグッときてたのだが、森君はそのへんあんまり興味ないみたいだった。

「結衣先輩の家、津島でしょう？」

「そだよ。近所だわ。だもんでここも小学校の時に社会科見学できとるよ」

「ふうん、じゃあ南朝だ」

「え？」

「俺、佐屋だもんで、北朝だで・・・」

佐屋というのは今は合併で愛西市という名前になっているけど津島のすぐ南隣にあつて、うちの高校も津島と佐屋のちょうど境あたりにあるのでかなり身近な存在なんだけど、北朝とか南朝とかはよくわからない。

「何それ？」

「知らんの？」

「全然知らんわ」

「なんか南北朝時代？ に、南朝の皇子が追われて逃げてきて、北朝方の佐屋の侍が殺そうとした時に南朝方の津島の侍が助け

たつてというのが天王祭りの由来つて、お腹痛い友達が言っとつたよ」

「ふうん、全然知らんかった。うち先祖代々津島つてわけじゃないで・・・」

「そうなんだ」

「ほんで森君とは佐屋の侍の子孫なの？」

「いや、先祖は農家だもんで・・・」

「ほうか」

「だもんで津島の人と佐屋の人が付き合つたらなんかええかな？ つて思つて・・・」

「ロミオとジュリエットか」

「うん」とはにかむ森君。ロマンティックか！ 森よ！

「エリちゃん今日模試だもんで。残念やったね」

「いやー実はエリ先輩はあんまり・・・話合わないつていうか・・・むしろ僕的には結衣先輩のほうが・・・」

あれ？ これ告白？ なんか森君ジャブ打ってきたの？ 森ジャブなの？ 告ジャブなの？ これがおじさんが言つてた風か？ ゲイつて行く時なのか？ 落ち着け私！

外に出て砂利の敷かれた庭を歩く。白い外壁がカッコいい。屋根にうだつが載っている。

「あれ、『うだつ』だわ」と自分を立て直して言った。

「え？ うだつ？」

「うん『うだつが上がらない』とか言うが？ あれが語源だが」

「へー。そうなんだ。あの槍みたいな奴？」

「いや、その左、っていうか奥。屋根の上になんか鳩時計みたいなもの付いとるが？」

「あー、あれね」

「あれ、飾りだで、高いんだって。お金持ちじゃないと付けられないのかわ」

「ほーん」

「うん。森君、顔まあまあいいけど、それだけだがね。伸びしろないでしょう？」

「え？」

「このままでと伸びてかんでかんわ。うだつ上がらんくなるで」

「そうなの？ やばくない？」

「うだつ上げてかなかんわ。信長みたいになりたいでしょう？」

「どうすればええなの？」

「成績ええなの？」

「全然あかんわ。赤点だわ」

「ほーん・いかんがね。ほんであんた彼女おるんか？」

「・・おらんけど・頭悪いのバレとるでかんわ」と言つて森君はちよつと私を見た。彼女おらんで、あんたを彼女にしたい、そういう顔だった！

これ絶対風吹いとる。私は裸一貫じゃない。お父さんとお母

さんがくれた、健康な身体とまあまああの顔とそこそこの努力で

蓄えた知力と、あとダメな叔父さんがくれたアドバイスもある。これは逃しちゃう駄目な風だ。

「・ほんなら私が勉強教えたるわ。そんで彼女になったるわ」

「え？ ・・・ええの？」

「ええよ」

「じゃあ・・よろしくお願いします」

なんとという僥倖！

「毎日ラインして」

「うん・・なんか結衣先輩、グイグイ来るね」

「そっちのほうがいいでしょう？」

「うん・・あのさ」

「何？」

「結衣って呼んでもいい？」

「いかんわ・・私県大行くで、あんたも受かったらええよ」

「はい」

「ほんならたこ焼き食べに行こか」

グイって行つたら風掴めた。

こうやって、今もつづく私の長いピークが始まったんです。

〈了〉

# 佳作 帰郷

中村 浩史

名古屋駅から名鉄バスに乗ると津島まで約一時間。名古屋鉄道の津島行き急行に乗れば二十分ちよつとで着くのだが、私はあえて時間もお金もかかるバスを選んだ。

バスからの風景を楽しみたかった……というのは言い訳にすぎない。確かに、バスのルートは県道を走るので久しぶりの帰郷を実感できるのだろうが、それよりも胸の奥底から込み上げてくる不安の方が大きく、笠松から乗った電車も名古屋で降りてしまった。

今から約五年前、私は自分の夫を殺した。

津島で生まれた私だが、物心ついた時にはすでに父親は他界していなかった。女手ひとつで一生懸命育ててくれた母。貧しいけれど、穏やかな暮らしがずっと続くと思っていたが、そんな母も私が二十歳のときに病気で亡くなってしまうた。

大学を出た私は、東京の小さな建設会社に就職した。

地元津島には疎遠な親戚がいるだけだった。天涯孤独となつた身で地元にとどまる意味が私にはなく、地元を離れて東京に

出るのは当然のことだと思っていた。

社内恋愛の末、結婚したのが入社して二年。すぐに子供もでき、私はこれからバラ色とはいかないまでも、人並みに幸せな人生が待っていると信じていた。

なぜこんなことになってしまったのだろう。どこで、間違えてしまったのだろう。

五年間檻の中で何度も自問自答を繰り返したが、未だに答えは見つからない。

正午に近い時間ということもあつてか、バスの乗客は私をふくめて三人だけだった。

後ろから二番目の席の窓際に座る。空はどんよりと曇っている。

実刑六年だったが、模範囚の私は五年で檻から出ることができた。

今、私は三十六歳。十分にやり直しがきく歳なのではあるのだろうか、私にとって檻の中で過ごした五年で、何もかも変わつ

てしまったような気がした。

正確には変わったというより、止まったというべきなのだろう。本当は地元などに戻りたくはなかった。しかし、戻らなければ、私はこれから一歩も先に進めない。それだけは揺るぎない事実だった。

バスはあつという間に大正橋の袂までたどり着いた。橋を渡れば名古屋市外に出る。

ふと、大学を出て以来の帰郷だということに気づいた。実に十二年ぶりの帰郷なのに、なんの郷愁もわいてこない。もしかしら、名古屋駅前前は新しいビルがいくつも建ち並び、私の記憶とすいぶん違っていたからかもしれない。

バスは庄内川を越えると右折。新川も越えると佐屋街道に入る。

昔ながらの家が立ち並び、私は少しだけ懐かしさを感じることができたが、それもつかの間の感情。すぐに霧散し消え去った。私が服役している間に、誰も住んでいない実家は娘の世話してくれている親戚の手によつて売りに出された。だから帰郷と言つても私には帰る家などない。両親の墓があるだけだが、東京に出て以来、一度も参つたことはなかった。

バスは順調に進んでいく。途中で乗り込んでくる人も、下車する人もいない。

夫が私に暴力を振るいだしたのは、娘の遙が産まれて一年ぐ

らい経つてからだったと記憶している。

理由はいつともとても些細なことだった。部屋の隅に埃がたまつている。洗濯物のたたみ方が気に入らない。料理の味が濃いなど。しかし、それもやがてなくなり、なんの理由もなく、私への暴行は日常の一ページになった。まるで毎日の日課のように。

私は五年間耐え続けた。全ては娘のためだった。青あざが消える日はなく、時には骨折するまで殴られることもあつたが、病院には行けないので痛みを耐えるしかなかった。

娘が殴られるくらいなら、私が殴られていればいい。そう思うことによつて、私の自我は何とか保たれていた。

どんなに暑い日でも長袖を着用し、サングラスをかけて娘を送迎する私を、近所の人はどう思っていたのだろうか。

高級マンションに住んでいても、ブランドものの服を着て、お金をたくさん持つていても、私には何の意味もなかった。

夫は弱い人だったんだと思う。結婚、出産、仕事で大きなプロジェクトを任せられたこと……それらの重圧に耐えられなかった夫のはけ口は、妻である私しかなかったのだ。

バスは佐屋街道を進んでいく。窓の向こうには見たことはあるがどこか違う風景が続く。

暖房が効いたバスは心地よく、睡魔に襲われる。当たり前のことだが、収監中は昼寝などできない。私は欲望

の赴くまま、目を閉じた。バスのエンジン音が子守歌になり、

すぐに眠りに落ちてしまった。

それは何度も見た夢だった。

狂ったように泣く娘。足元には夫が倒れ込んでいる。ゆっくと血が床に広がっていく。

私の手には血で染まった包丁が握られている。いや、包丁だけではない。私自身も血だらけだった。

「もう終わったから……ようやく終わったから。終わらせたから。安心していいのよ、遙」

娘の遙は泣き止まないどころか、さらに大きな声をあげた。

私は携帯電話を取り出し警察に電話をする。

なぜ、なぜ、なぜ、どうして……どうして遙は笑ってくれないの？ もう何も心配しなくてよくなったのに。

「……！」

大きく息を吸い込みながら、微睡から目覚めた。もしかしたら、少し叫んでしまったかもしれない。周りも見渡してみたら、いつの間にか乗客は私しかいなくなっていた。

額に滲んだ油汗をぬぐう。バスは日光川に差し掛かっていた。ほんの数十分眠っていただけだった。

檻の中で何度も見た夢。それは何度見ても慣れることはなかった。

あの日、夫は初めて遙に手を上げた。

その瞬間、私の中で何かがはじけ飛んだ。キッチンにある包

丁を手に取り、何の躊躇もなく夫を刺した。

その後の記憶はかなり曖昧だった。取り調べ、裁判、そして収監。

まるで現実味がなく進んでいった。あの日以来、遙には会っていない。

日光川を越えたところにある、古川でバスを降りた。津島駅まで乗っていく気にはなれなかった。もし、親戚や知り合いにばったり会ったりでもしたら……そう考えるだけで背筋に冷や汗が流れる。

十年も会っていない私のことなど、誰もわかりはしないのでは？ 髪も短くなり、監獄生活ですっかりやせ細った私。昔の面影などかけらもないと、自分では思っている。

遙は私だと気づいてくれるだろうか。そもそも私のことを憶えているのだろうか。

刑務所の中で何通も何通も遙に手紙を出したが、一度も返事はきていない。

遙を引き取った親戚は唯一の親族であり、私の身元引受人でもあるが、刑務所に来た手紙には「二度と私たちに手紙を出さないで欲しい。出所したら永遠に姿を消して欲しい。遙のことは責任を持って育てる」といった内容のことが記されていた。

私は親戚の言う事は無視して、遙に手紙を出し続けた。

バスを降りた私は、ヨシツヤに向かって歩いた。

地元のスーパーヨシヅヤは、用もないのに何度も行った場所だ。店内に入ると、懐かしい音楽が聞こえてきた。その時はじめて、地元に戻ってきたんだという実感がわいた。

ふらふらとした足取りでフードコートに行き、スガキヤでラーメンを頼んだ。

出来上がってきたラーメンを一心不乱にすすった。娑婆に出てきて初めての食事がスガキヤだなんて、笑ってしまふ。

(美味しい……)

味覚と嗅覚は記憶に強く結びついているという記事を何かで読んだことを思い出した。

しかし、どんなに懐かしい味を楽しんでも、あの日に止まってしまった時間が動き出すことはなかった。目に映る風景もまるでモノクロ映画を見ているようで、現実感がない。

夫のDVに耐えた五年。その後服役した五年。私の十年という時間はなんだったのだろう。

痣だらけの体では、パートに行く事も出来ず、毎日家の中に引きこもる生活。社会と隔絶された私の感覚はどんどん狂っていき、時間の流れもよくわからなくなってしまった。

夫がいなくなれば、全てが変わると思っていた。しかし、何も変わらなかった。変わらないどころか、私の支えであった遥もいなくなってしまう。

後悔するのは娘と引き離されたことだけだ。夫を殺したこと

に何の後悔も罪の意識すらもない。

食事を終えた私はヨシヅヤを出て歩き出した。四時の待ち合わせにはまだ二時間近くあるが、ヨシヅヤでは知り合いに会う可能性が高すぎる。

遥は来てくれるだろうか……。そのことを考えるだけで、鼓動が急激に早くなる。

二月は昼間でもまだまだ寒く、私はヨシヅヤで買った安いフリースのジャケットを羽織った。

最後に出した手紙には「出所が決まったこと。今日の四時に東公園で待っていること」を書いた。

何もかもなかったことにして、やり直せるなんて思っていない。

目の前で遥の父である夫を殺してしまった私に、もはや母を名乗る資格などないのかもしれない。

昼間の田舎道は車はそこそこ走っているが、誰も歩いてはいない。ダラダラと歩き続けていると、やがて市民の森にたどり着いた。

何の意思もなく、吸い込まれるように森の中へと入って行った。まあ、森というより林といったほうが正しい。雑木林の遊歩道と表現するのもっとも正しいような気がした。

目的地である東公園からは近いのだが、私は「市民の森」を訪れたのは初めてだった。

森を抜けると、急に視界が開け、目の前には小さな原っぱが広がる。少しだけ遊具が置かれた原っぱの先には、目的地である東公園が見える。

原っぱに置かれたベンチに腰掛けた。

左手には錬成館。右手には市営球場が見える。風に乗って錬成館からだろう、剣道の掛け声が聞こえてくる。

私はしばらくの間、その声に耳を傾けながら、ぼんやりと空を見上げた。

雲がかかった空は雨こそ降りはないが、眺めていて楽しいものではなかった。

これから私はどこに行き、何をして生きていけばいいのか。何もわからない。何も決められない。

遙に会えても会えなくても、明日からは出所する時にもらった在監証明書を手手に、役所の各部署をまわらなくてはいけない。自分に強くそう言い聞かせる。

ベンチから重い腰を上げ、公園に向かって歩き出した。

公園の時計は三時を指していた。あと一時間。公園の中にある津島児童科学館の前を待ち合わせに指定したが、まだ誰の姿もなかった。

公園には子供を連れだした母親の姿がちらほらと見かけられた。

私には違う世界のことのように映る。遙とこんな風に遊んでみたかった……それは永遠に叶わぬ願いだった。

時計の針が三時半を回った。手がじつとりと汗ばむ。

私は居ても立ってもいられなくなり、公園内のジョギングコースを行ったり来たりと歩き出した。

遙ほどのくらい大きくなったのだろうか。四月からは中学生になるはずだ。女の子が通るたびに遙と思ひ、不審者と間違われるくらい凝視してしまう。

どうしても会いたいと思うと同時に、膝が震えるくらい会うことを恐れていた。

今すぐ逃げ出したかった。でもどうしてもできない私がいた。十五分前。

ついに歩くことでは抑えきれず、ジョギングコースを走り出した。

十分前。五分前。そして、四時。

走ることをやめられなかった。少し遅れているだけだ。自分にそう言い聞かせながら、私はひたすらに走り続けた。

五分後。十五分後。三十分後。一時間後。

公園は茜色に染まっていた。息が上がり、これ以上走れなくなった私は、科学館前に崩れ落ちるように倒れ込んだ。

来るわけがない。少しでも希望を持っていた自分を激しく責めた。

起き上がり、階段に腰を下ろした。全身が鉛のように重かった。汗が乾き、容赦なく体温を奪っていく。

寒さに震えながらも、動く気にはなれなかった。このまま死んでしまうことが運命にすら感じていた。

陽は沈み、あたりは暗闇に包まれていく。

またひとり、またひとりと、公園で遊んでいた子供たちが家に帰っていく。

そんな中、陽が沈んだ中でも遊んでいる子供が一組いた。小学生高学年くらいだろうか、大きな声で次の遊びを説明していた。「じゃあ、十数える間に、俺がこれを隠すから、お前ら五分で見つけるんだぞ。見つけれなきゃ罰ゲームな」

その瞬間、私は思い出した。私が怠だらけのせいで公園にも連れて行けず、無駄に広い家の中で遊んでいた時のことを。

どうして今まで忘れていたのだろう。何度も何度も遊んだのに。私が十数え、遙がその間に指定したものを隠す。遙が隠したのを見つけたら私の勝ちだ。わざとわからないふりをして大げさに探し回ったりしたが、それがとても楽しかった。

暗闇に目を凝らし、私は科学館の周りを注意深く見渡した。すると、科学館の郵便受けが取り付けられた壁との間に、何か紙が挟んであるのを発見した。

それはほんの少しだけ隙間からはみ出ており、よほどのことがなければ気づかないと思われた。

私は確信をもって、その紙を引き抜いた。それは手紙だった。

表には「お母さんへ」。裏には「遙」と書かれていた。

鉛のような体がすつと軽くなるのを感じた。それとは反対に頭は真つ白になり、何も考えられなくなった。

気が付けば、声を上げて泣いていた。

この手紙の中には、私をさらにどん底に突き落とすような内容が書かれているかもしれない。

しかし、今の私にはそんなことはどうでもよかった。五年間、送り続けた思いが、今返ってきたのだ。そのことがただ嬉しかった。

止まっていた時間が動き出すのを感じた。

夜の暗闇の中でも、極彩色に彩られた風景が目の前に広がる。ありがとう。

手紙を握りしめながら、何度も何度もつぶやいた。

〈了〉

## 応募点数九四編

ありがとうございます

津島市への来訪者を増やすことによりまちに「へにぎわい」を創出する「津島（へにぎわい）創出プロジェクト」。その取組のひとつとして、「津島短編小説コンテスト」を実施しました。

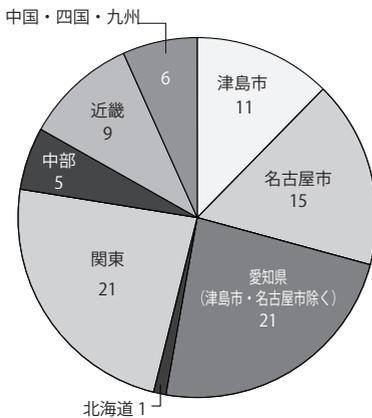
作者の年齢は、十三歳～八十四歳までの幅広い年齢層の方から応募があり、応募総数は九四編でした（選考対象は八九編）。作者の居住地は、津島市内十一作品、名古屋市内十五作品、その他愛知県内二十一作品となり、愛知県内からの応募が約半数となりました。

舞台となった場所は、津島市を代表する観光スポットが上位を占めました。作者ごとに異なった視点で味わい深い津島市の魅力が描かれている作品を多数ご応募いただきました。

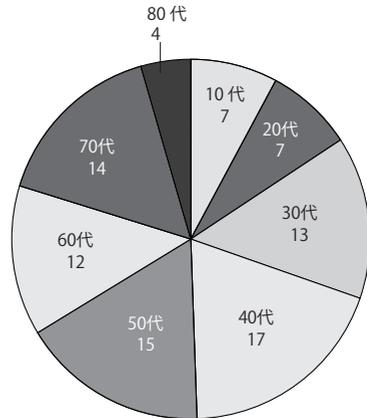
一次選考は十一月から十二月にかけて実施され、十三編が最終選考作品として選ばれました。最終選考会は平成三十年一月二十三日に行われ、大賞一編と佳作一編が選出されました。

たくさんのご応募、ありがとうございます。昨年度の受賞作品とあわせて読んでいただき、津島市を知りたい、訪れたいと思っただけると、幸いです。

住所別応募者数



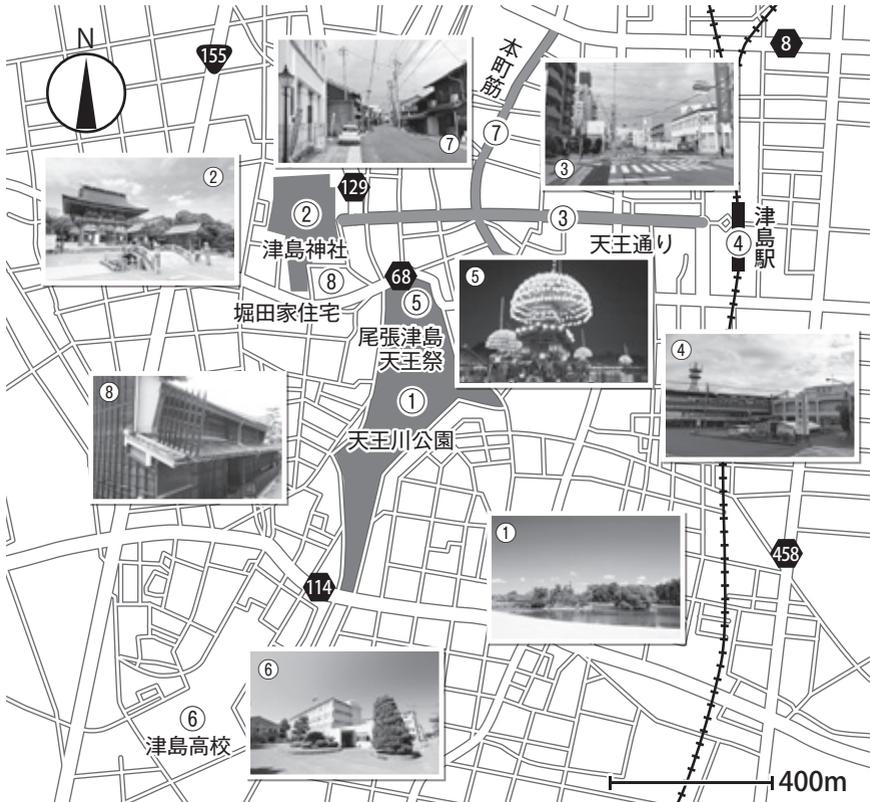
年代別作品応募数



※選考対象外の5編を除く

## 舞台となった主な場所

場所（選考対象外含む）	件数
天王川公園	56
津島神社	36
天王通り	13
津島駅	8
尾張津島天王祭	6
津島高校	4
本町筋	3
堀田家住宅	3



# 短編小説コンテスト募集要項

## 募集期間

平成29年8月1日火曜日～10月31日火曜日

## 応募作品

左記に該当する短編小説

- (1) 津島市を舞台とした作品であること
- (2) 日本語、縦書きで400字詰め原稿、12枚～20枚の作品であること
- (3) 応募者が創作した未公表の作品であること

## 応募方法

- (1) 専用WEBサイトからアップロード
- (2) メール [novel@oshior.jp](mailto:novel@oshior.jp)
- (3) 郵送〒496・0807 愛知県津島市天王通り六丁目1  
六三ビル204号  
一般社団法人にぎわい創出機構OHSO(短編小説コンテスト係)  
スト係)

## 選考

・一次選考で選出された作品を対象に、最終選考委員5名による最終選考委員会を開催し、受賞作品を選出します。

・最終選考委員は、委員長 堀田あけみ氏(作家・大学教授)、清水義範氏(作家)、清水良典氏(文芸評論家)、熊澤尚人氏(映画監督・脚本家)、木全純治氏(映画館支配人)

## 賞

大賞(1編) 賞状、副賞(30万円)  
佳作(1編) 賞状、副賞(10万円)



REDISCOVERY TSUSHIMA  
津島短編小説コンテスト

平成29年度受賞作品集—愛知県津島市が舞台の短編小説

---

発行 津島市  
〒496-8686 愛知県津島市立込町2丁目21番地  
TEL (0567) 55-9589

平成30年3月10日発行